

幼児の教育 第99巻 第8号 平成12年8月1日（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可 ISSN0289-0836

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

2000 / 8



第99巻 第8号 日本幼稚園協会

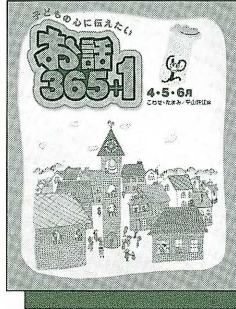
一日一話、読み聞かせに最適の1冊です

子どもの心に  
伝えたい

# お話365+1

## 最新刊

世界や日本の昔話  
・創作童話の中から、子どもに話して聞かせたいお話を366厳選し、一日一話に配分してあります。  
楽しい話、怖い話、びっくりする話など、また、美しい言葉の詩も加えています。  
大人が読む手がかりとなる「ひとくちメモ」「今日は何の日？」のコラムも設けてあります。



●4・5・6月

●7・8・9月



●10・11・12月



●1・2・3月



こわせ・たまみ／平山許江／編

AB判 各212頁 各定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの  
**フレール館**

# 幼児の教育

第99卷 第8号

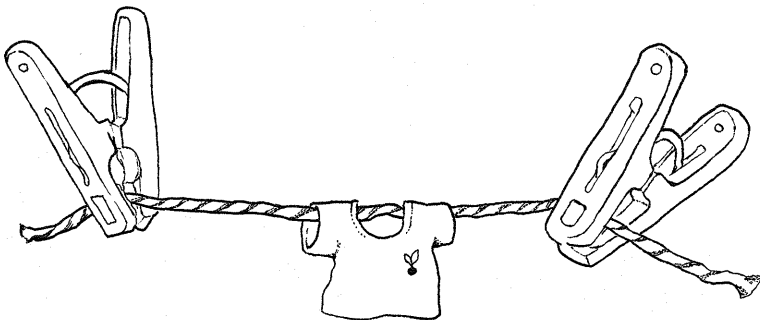


# 幼児の教育 目次

— 第九十九卷 第八号 —

© 2000  
日本幼稚園協会

ある日……………	(4)	
卷頭言 「原体験」をキーワードに……………	(6)	岸井 勇雄……………
私が幼児教育を志した頃(10)……………	(10)	津守 真……………
比企の畑から・夏……………	(19)	小宮山洋夫……………
幼稚園誕生の時代―関信三の葛藤― (三) 謀者報告書……………	(24)	国吉 栄……………
耳をすまして 目をこらして(5)……………	(34)	宮里 暁美……………



いま、子どもたちは

母子のいま(3)社会性をめぐる子どもたちの状況……………山崖 俊子…(36)

特集〈緑蔭図書紹介〉

辞書と人間……………上野 浩道…(44)

忘れられない本……………福元 貴子…(48)

犬丸りと香川県健康福祉総務課のホームページ……………山本 政人…(51)

心の目で見える環境問題……………吉増 克實…(55)

つながりが見えてくる時……………永倉みゆき…(59)

表紙絵／田中 千尋

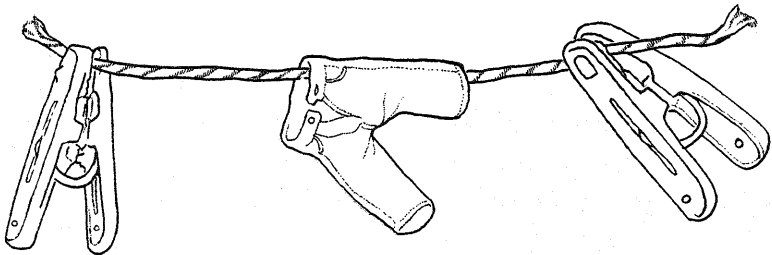
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「夏の風」

編集委員／田代 和美・田中三保子・高橋 陽子

編集部／仲 明子



# ある日





撮影・平野 清

## 「原体験」をキーワードに

岸井 勇雄

本誌二月号で繁多進氏が指摘されたように、人間やこの社会に対する愛と信頼——これほど一生を幸せに生きる力の根源に必要なものはないと思われるが、この深く、かつ高度な人格の核は、まず、赤ちゃんらしい生活を十分にすることによって形成される。乳児が泣くたびに母親またはそれに代わる一定の保育者が、「ああよしよし」とやさしく声をかけながら様子を見、必要に応じて授乳やおむつの交換をする。これが夜中まで含めて一日に何度となく、三百六十五日繰り返されるのが乳児期というものである。この中で乳児は、自分が泣いて不具合を訴えると必ず、裏切ることなくまると取り上げて善処してく



れる人がいる、自分は愛されている、この世は信頼に値する、と体感し、人格の中核に貯め込んでいくのである。

ある公立幼稚園が国の研究指定を受けて実践研究を行った時のことである。そのお手伝いに行つたところ、区の教育委員会の指導主事がその日の指導計画を見て、こんなことから幼稚園はダメなんだと怒つていらつしやる。それは、「ねらい」の一つに「気の合った友達と仲よく遊ぶ」とあつたからだつた。教育とは子どもをよくすることであるのに、気の合った友達と仲よくしたつてよくすることにならないじゃあないか。担任の先生が、ではどう書けばいいんですかと教えを請うたら、だから「気の合わない友達と仲よく」に決まつてるじゃないか、と言われたのである。当時文部省にいた私は、教育委員会の先生とは連帯責任があるので、現場の先生の前では対立するわけにいかず困つたが、見過ごすわけにはいかない。

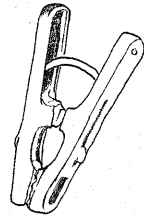
幼児教育については素人とお見受けしたので、将来だれとでも仲よくできるためにこそ、幼児期に気の合った友達ととことん遊び込んで、「お友達つていいもんだ。仲よくするつて素晴らしいことだ」という原体験を十分に貯め込むことが大切なのだというお話をした。私たちが多少気の合いそうにない人とでも、自分から頭を下げて握手を求めることができるとは、「ひとたび仲よくなれば、あの素晴らしい世界が開ける」という原体験をもっているからである。それを、目に見えてよくする教育だけを考えてみると、担任の教師か

ら見て仲のよくないAちゃんとBちゃんを組ませて「仲よくしなさい！」と言うのは易しいけれども、その二人にとつての原体験はどういうものになるだろう。「仲よくするなんていやだ、お友達なんて面倒くさい、ひとりですんでいた方がずっといい」

——というマイナスの原体験になる。近頃は大人の管理のもとに早くから「だれとでも仲よく」という、結果として完成された姿を求めるために、かえって人間嫌いやいじめの原因につながっているとも考えられる。

その方は賢明、率直な方で、その説明を聞いて眼からうるこが落ちた、自分と同じように誤解している全国の教育関係者にぜひこの話をしてくれとまで言ってくれた。自分と振り返って見ればわかることだが、自分が得意なことはそれだけやったことであり、不得意なことはやらなかったことである。そしてその分かれ目に幼児期の原体験があることに気づく。幼児は自分の中に育ってきた力を必ず使おうとする。環境の中にそれに当てはまるものを発見すると興味関心もち、それに取り組む。それが楽しくて頑張ったものが得意になり、環境にそれがなかったり、したくないものを強制されたり、せつかくやっているものをそれじゃだめだと言われたりしたものが不得意になっているのだ。

幼児はどのような場合に楽しいかを洗い出し、次の十項目にまとめたことがある。



(1)自発・主体性の發揮(したいことをする楽しさ) (2)全力の活動(全力をあげて活動する楽しさ) (3)能力の伸長(できなかったことができるようになる楽しさ) (4)知識の獲得(知らなかったことを知る楽しさ) (5)創造(考え出し、工夫し、つくり出す楽しさ) (6)有用・善行(人の役に立つ・よいことをする楽しさ) (7)人格の承認(存在を人に認められる楽しさ) (8)共感(共感する楽しさ) (9)出会いと認識(よりよいものに出会う楽しさ) (10)愛・友好(好きな人と共にある楽しさ)

幼児期の楽しい思い出の有無は、生きる力の火種の有無に等しいと服部祥子氏が言われる通り、それ以前の乳児期を含め、生涯の人格形成に大きな影響を与える初期の体験としての原体験は幼児教育の核心をなす。目に見えぬ原体験の根の上に、知識・技能の系統学習を中心とする学校教育の幹が育つ。倉橋惣三先生が「生活の教育化」対「教育の生活化」と明確に対比されたように、両者を混同することなく、幼児教育の本質を求めていきたい。

(昭和女子大学)



# 私が幼児教育を志した頃 (10)

津守 真






## 米国留学

一九五二年（昭和二十六年）、私は米国に留学した。日本は占領下にあり、米国に留学するのは極めて困難な時代だった。一九五〇年代初頭のアメリカは、黄金時代と言われたときで、敗戦直後の日本とは対照的だった。一ドルが三六〇円の時代で、私の父は私の志を励ましてくれて、勉学の生活には困らなかったが、渡航費を考えただけで米国留学など不可能だった。私が保育学を志したのは、この二十世紀の戦争と文化と世界の中でだった。いま人生の主要な時期を通り過ぎて考えるとき、私の生涯の導き手である神の大きな力とあらゆる機会がこのように仕向けたとしか思えない。



私が留学したのは、フルブライト留学生の制度ができる以前のことで、私は、前年にミネソタ州立大学児童研究所 (Institute of Child Welfare) 大学院より入学許可と授業料免除を得ていたが、当時は米国滞在中の生活保証がなければヴィザを貰えなかった。私が中学生の頃から私の家の家庭集会で聖書講義に来ておられた吉田隆吉牧師の親身な推薦があり、ミネソタ日本人教会牧師北川大輔先生とアルバータ・トンブソン夫人の尽力により、ファースト・コングリゲーションナル・チャーチ・オブ・ミネソタがスポンサーを引き受けて下さった。戦後直後の米国のキリスト教会には、戦争中に敵国だった国の青年の世話をしようというスピリットが生きていたことを私は後になって知った。

私は昭和二十五年秋より、新制大学となつたばかりのお茶の水女子大学家政学部児童学科の非常勤講師になつた。愛育研究所の、知恵遅れの幼児の特別保育室も軌道に乗つたばかりで、それを離れて外国に行くことにもためらいもあつたが、私はこの機会を自分の運命として受けようと決心した。飛行機ではなく、私は貨物船の客として渡航した。当時はそれが一番廉価な渡航法だつた。十一月十四日、私の乗つた飯野海運の「若島丸」は広島県の因島から出航した。因島に向かって出発するときには、東京駅まで、特別保育室の親子たちが見送りに来てくれた。私は恐らく船で米国に渡つた最後の留学生だと思つたので、そのことから私の留学体験を記そう。



## 日本の港を離れて

船の中にどら響き渡った。出航の合図である。外国に行くことを身近に感じていなかった私の体中からさっと血がひくのを感じた。船の中にまで送ってくれた母、妹、それから私の婚約者は船を降りなければならぬ。何分かの後に出る。船のボーイが、もう何分もありませんからゆっくりお別れ下さいと言って、部屋を出て行った。ボーイの声が外から聞こえた。「お時間でございます。早くお出にならないと、船が出帆致します」。私は皆を送って甲板に出た。船の汽笛が十一月の朝の空気を振って鳴り響いた。皆、駆け出すように船と陸とをつなぐ棧橋を渡って行った。最後の人が棧橋を渡りながらも一度振り返った。私は思わず「危ない」と叫んだ。

棧橋は静かに上がり、船はドックを離れて音もなく動き出した。船員が忙しく甲板を走り回っていた。船のボーイが私のためにテープを陸に投げてくれた。そのテープがするするとのびて、陸の人の顔が次第に霞んで来た。私は陸から目を離すことができなかつた。船はやがて岬をまわって、港は見えなかつた。

船は半日瀬戸内海の静かな美しい海を東に進んだ。陽当たりの良い甲板に椅子を出して、私は別れて来た人達のことを思い出していた。やがて船は淡路島をめぐる大坂湾から紀伊水道を通り、潮岬を目の前に見て、太平洋に出た。二日目から船はひどく揺れ始めた。冬の北太平洋は荒れるので定評のある航路である。冬の荒海の夜、私



は幾晩もブリッジに出て海を眺めた。背丈よりも高い大波の上に船が乗るかと思うと、次には谷底のような波の間に船は落ちて行く。舳先は真つすぐに東へと向かつている。船のエンジンの音が絶え間無く耳の底をはなれない。潮風の中を行く船に絶えず塗るペンキの臭いが食欲を失わせる。客は私ひとり、船長室の隣に個室をもらっていた。食事は船長と、一等航海士、機関長、パーサー、通信士、ドクターと一緒にする。船が揺れるとき、私の皿が船長の前に滑り、機関長の皿が私の前にきていて、そのときは皆で笑った。船はほとんど二週間揺れ続け、私はベッドの上で輾転反側する日夜を過ごした。このことは、航海に慣れた船員たちも同様らしく、皆その苦しい生活に耐えていた。一日も早く足の下が動かない大地に着くことを願う気持ちは皆に共通だった。通信士が、公海上では日本に電報を打てることを教えてくれたから、私は毎日家族と電報で俳句のやりとりをした。荒れに荒れた一週間の後に、私は次第に船の動揺に身を任せることを覚え、心も平静を取り戻して来た。晴れた夜には荒海の上を月を見ながら、出発前に倉橋先生から言われた「月は世界中どこから見ても同じだ」という言葉を思い出した。そして太平洋上の月を仰ぎながら、次第に未知の世界アメリカで始まろうとする冒険に心を向けた。そのとき心に決めたことは、これから来るべき世界に白紙の人間の心になって、自分のまわりに起こる事柄を素直にありのままに受けていこうということだった。太平洋の荒海を昼も夜もエンジンを唸らせ



て、遅いながらも絶えず進むうちに船はきつと目指すアメリカの港に着くのだろう。私も、歩みは遅くとも一日一日を過ごすうちに来るべき未知の生活を乗り切るだろう。ただ進むよりほかに道はない。

こんなことを考えて、二週間心の準備をできたことは、あつと言う間に飛行機で目的地に着いてしまう現代よりも恵まれていたと思う。この後、私は困難に出会うたびにしばしばあの荒海の上の日々を考えた。

### 初めて見るアメリカ

入港の一日前になると、船のマストのまわりに鴉が飛んでくる。波の間に静かにおりて、翼をたたんで浮かぶ。足が赤くて大きな目が可愛い。まだ見えないが近づいてきた陸からの使者である。

十一月二十八日、午前二時頃、眠っていた私を船長が起こしてくれた。「シアトルが見えますよ、ほら、あれです」と指さした。海の上から見るシアトルの港は宝石をちりばめたように、青い街灯の光、ネオンサインの赤や黄色が夜空に浮かんでいた。ゆっくりと静かな湾を入って行く船のブリッジに立って、私は未知の世界に想像をめぐらした。

シアトルの埠頭には、吉田牧師の紹介によるシアトル日本人教会のツァイ牧師が出





迎えて下さった。蒋介石の台湾国民政府から最近米国に逃れて来られた台湾出身の人である。その晩は、一九四七年二月二十八日の国民党政府による台湾独立運動弾圧の話聞いた。当時の日本人は知らなかった話である。

十二月二日、シアトルからグレイト・ノーザン・レイルウェイに乗り、私はミネアポリスに向かった。現在と違って米国でも西部から中西部、東部に行くのには自動車よりも汽車が使われていた。汽車の中で二晩を過ごさねばならなかった。隣席の人は日本から帰ったばかりの米軍下士官だった。日本で見ると占領軍のG Iは特別の人だったが、ここではただの同乗者だったことに驚いた。ビールを飲もうと誘われたときには恐ろしく感じて断ると、それではコーヒを飲もうと夜の車中の暗い通路を通って食堂車に案内してくれ、翌朝も朝食を共にした。親切な人だった。日本では四月にマッカーサー元帥が罷免されてリッジウェイに代わったところで、日本人というものがそのことを話題にした。

十二月四日、汽車はミネアポリスの駅に着いた。ホームで北川大輔先生の大きな手と、アルバータ・トンプソン夫人の笑顔に迎えられた。書類の上だけではなく、私を実際に待ってくれた人がいたことを知って、長い旅の間私の心の奥に抱えていた心配がすっと消えた。翌日から私がひと月お世話になる家庭のことも話された。その後の家庭はまだ決まっていないうが、顔を見れば世話する人も出てくるだろうとのことだっ



た。

いまになってこのことを思うとき、北川先生とトンプソン夫人の共通の理念に支えられた友情とその度量の大きさに感心させられる。第二次世界大戦中、敵国人收容所のチャブレンだった北川先生は日本人であるが、戦後直ちにミネアポリス市長諮問委員会人種問題部会の委員長となり、同じ委員であったトンプソン夫人と苦勞を共にしておられた。その後私のミネアポリス滞在中に次第に知ったのだが、北川先生は日本人一世の生活問題の世話をしながら、米兵と結婚した日本人女性、黒人やアメリカインディアンを親身に世話をしておられた。トンプソン夫人は米国のさまざまな人種（マイノリティ）の人々の住宅、就職問題から、留学生の世話に家族ぐるみでかわっておられた。ミネアポリスは米国中西部（ミッドウエスト）ミネソタ州の州都で、南北戦争のときには奴隷反対運動の先頭に立ち、南部から多くの黒人がこの町に移ってきた。その進歩的な氣風が一九五〇年代はじめのミネソタには生きていた。この二人の方がいなかったら私の米国留学はなかったと思う。最初から綿密な計画のものになされたのではなく、いざとなれば自分たちが引き受けなければならないという大雑把な大胆さがあつたことを、これも後になって私は氣が付いた。戦勝国も戦敗国も人間は皆同じだから、援助を必要としている人がいたら自分たちの出来ることをするのは当たり前ではないかという、当たり前でも実行は難しいことを氣張らずにしておられ



た、普通の市民だった。

私の米国留学は、家庭を通して人と人が直接に知り合うことが世界平和の基礎であることを実地に学んだ一年十カ月だった。その間に私はなんと十三軒の家庭で一カ月ずつお世話になったのである。

### 米国の家庭―クラウンズ家

夜八時、私は北川先生とトンブソン夫人に連れられて、これから一カ月泊まることになっているクラウンズ家を訪ねた。

ドアをあけると、白髪のクラウンズ夫人が両手をひろげて私を迎えてくださった。長身のクラウンズ氏は後ろに静かな笑顔で立っていた。

クラウンズ家の玄関を入るとすぐに目に付いたのはガラスのケースに入った大きな日本人形だった。クラウンズ夫妻は日本の青年が来るというので四十年前に伯父さんからもらったという日本人形を私のために屋根裏から出して飾っておいてくれたのだった。「あなたのお国の友達も待っていますよ」と言った。私は遠くに残して来た婚約者のことをすぐに思った。クラウンズ夫人は間をおかずに、「私たちは、この間まで戦争をしていた敵国の青年を家に泊めたいと思い、トンブソン夫人の提案を聞いて直ちに応募したのです」と言った。続けて、「パールハーバー（真珠湾）を私共ア



「アメリカ人は忘れない」と言った。私は慣れない英語で一生涯命に何か言ったと思う。クラウンス夫人はつづけて「この日本人形は、戦争中も私たちは大事にしていたのですよ」と言い、私ももう一度つくづくこの可愛い人形を眺めた。じきに私共の間の空気はなごやかになった。

「二階のベッドルームと、三階の屋根裏部屋と二部屋あいているから、あなたの好きな方を選んでくれ」と言って、案内された。二階の部屋は隣室には夫人の姉で寡婦になつてゐる老婦人が住んでいた。私は迷わずに三階の屋根裏部屋を選んだ。廊下のドアをあけると急な階段がついている。小さな洗面台があり、小さな机の上にはラジオがおいてあつた。夜おそくなつてその部屋に落ち着いたとき、私は机の上に一冊の本を発見した。布製の英語版絵本の『かちかち山』だった。ありたけの日本のものを私のために取り出しておいた心遣いが身に沁みて感じられた。娘さんが学生時代に使つていた部屋とのことだった。

翌日からクラウンス家での生活が始まつた。

# 比企の畑から・夏

小宮山 洋夫



ナスの花と実

梅雨期、ナス、トマト、トウモロコシが、背丈をぐーんと伸ばす。カボチャ、キュウリ、サツマイモが、つるを伸ばし、葉を茂らせ、地面を埋めていく。

これらの夏野菜は、水に恵まれる梅雨期が、身体の生長期なのである。

早春に植えたジャガイモは、白い花をつける。

土のなかでは、イモがふとりはじめている。草取りをかねながら、イモが地上に顔を出さないよう、土をかぶせる。

クワをさくつと畝間に入れ、その上に土を乗せ、株元に土を寄せる。この土寄せは、農作業のなかでも、もつとも魅力あふれるものの一つだ。

これは、耕すのではない。大地を右に左に、動

かすものだ。コツをつかむと、呼吸とクワの動きが同調して、ほとんど疲れない。

「畑は雑草とのたたかいだから」

畑仲間のMさんが、語る。

「いや、ぼくは、雑草はそれほど嫌いじゃないですよ」

腰を折るような返事をしてしまった。

梅雨期は、野菜だけではなく、メヒシバ、エノコログサ、イヌタデ、カヤツリグサなどの雑草が、猛々しく、繁茂する季節でもある。

しかし、この夏の雑草は、ただ単に、畑の困りものというわけではない。夏野菜の生育を助ける、貴重な素材となる。

雑草は、梅雨明け前、穂をつけ、種を結ばないうちに刈り取って、ナス、トマト、キュウリなどの株元に敷きつめると、野菜の根の張りをよくし、土の乾燥を防ぐ。

やがて、雑草は

バクテリアによって分解され、土をつくるとともに、

肥効を発揮するよ

うになる。自然

は、人為にやみくもには、敵対しない。



ジャガイモの花

夏の実もの野菜の収穫の最盛期に先立って、ジャガイモを収穫する。イモ掘りといえは、何といても、サツマイモだが、ジャガイモも、けっこう楽しい。

「ことしは、出来がいいですね」とHさん。

「ええ、たくさん、ついています」

みるみるうちに、ジャガイモの山ができる。

ジャガイモは、冬の寒さに強い。上手に保存すると、次年度の植えつけ時期まで食べられる。価

値ある大地からの贈り物だ。

ナス、トマト、キュウリの摘み取りが、忙しくなる。これらの実もの野菜の収穫に、栽培の確かな手応えと充足感を、強く覚えるのは、なぜだろう。

真つ赤に熟したトマトは、鳥たちの好物でもある。被害を防ぐには、ネットを被せるしかない。しかし、ネットでおおわれたトマト畑の眺めは、美しくない。それで、鳥につつかれる前に、赤く色づいたら、すぐにもぎとるようになった。

キュウリは、手間を省いて、もっぱら、地を這う「地這え」をつくっている。

キュウリの実の肥大は、とても早い。葉や草の陰に隠れ、丸太のように太ったものに、出くわして、はっと息を飲むことも、しばしばある。巨大キュウリは、縦に割り、種を除き、キュウリもみにすると、爽快な歯ごたえを楽しめる。

エダマメの実が太る。株ごと引き抜き、クワの木の木陰に腰をおろし、実を株からむしり取る。

もともとこのあたりの畑は、かつてみんなクワ畑だったという。それで、畑の南の隅にいまでもクワの木が数株残されている。カンカン照りの真夏には、それらがつくる緑陰がうれしい。

クワの黒く熟した実を摘み取って、味わう。ふと、実のなかに小さな虫を見つけ、ぎよつとする。そして、つぶやく。

「この虫は、動物化したクワの実なのだ」

「トウガンを、つくってみませんか」

Hさんから、トウガンの苗をもたらった。はじめての栽培だ。



トウガンの雌花と雄花

日さんは毎年、トウガンの種を、堆肥の山の上層に埋めておくという。すると、アジサイの花の咲くころには、苗として利用できる大きさに育つ。その間、何の世話もない。この放任、簡単苗づくりに、心から感心してしまう。

葉の大きさはキュウリ、カボチャのそれに比べ、かなり小さいのに、トウガンは、びっくりするほど、巨大な実をつける。畑に、白い粉でおおわれた実が、いくつもごろんと横たわる風景は、なかなか迫力がある。

収穫は夏の終わりから、秋にかけて。約六か月間も保存に耐え、冬にさしかかるまで食べられる。それで「冬瓜」と呼ばれるのも、栽培してから知った。

丘の上の畑仲間、四人。八十年代、七十年代、六十年代、五十代と、各世代を代表して参加している形になっている。

ぼくのすぐ隣の畑は、五十代のT氏の区画。Tは最近、小型の耕運機を手に入れた。タツ、タツ、タツと、軽快に耕している。

「どうですか。使ってみませんか」

Tは、申し出てくれる。

「あ、ありがとう。まだ、大丈夫。そのうちに」

しかし、ぼくは、いつまでも、クワとシャベルを使い、自分の手足を働かせるだろう。

畑を西に下ると、鳩山の町をほぼ二分して南北に走る車道に出る。いまは、面影がほとんど残されていないが、かつての鎌倉街道の道筋と、ほぼ重なっている。道にそって、町役場、文化会館、保健センターがある。

これらの公共施設の南寄りの集落に、小さなギャラリーがある。ここで開いた友人の個展を観賞していると、

「サルが出た、サルが出た」





### 畑よりパラボラアンテナを望む

とギャラリーの主人が表で叫んでいる。近隣住民も集まってきた。サルが二階の手すりから、さつと姿を消した。そのあたりは、裏山から野ザルが時折、出没するという。窓さえ閉めておけば悪さもしないので、放っておくそうだ。深山でもないのに、おどろいてしまう。

農家の人の声は耳にしていけないが、サルと共生できれば、それほど豊かなことはない。

サル山の向こうに、気象庁のパラボラアンテナが設置されている。わが菜園からも見える。余命いくばくもない気象衛星「ひまわり」の情報も、キャッチしている。

アンテナを遠く望みながら、畑仕事を、一休みしよう。

(家庭菜園研究家)

カット 筆者



# 幼稚園誕生の時代

— 関信三の葛藤 —

国吉 栄

## (三) 諜者報告書

### 諜者報告書

もう二十年以上前になると思うが、「この人のことじゃないか？」と夫が一冊の本をもってきてくれた。扉を開くと、目次に「安藤劉太郎の耶蘇教探索報告

書」という項目が見えて、驚いた。「安藤劉太郎」は、関信三の横浜時代の名前である。夫は、「日本最初の幼稚園長は、かつてキリスト教諜者をしていた僧侶だった」と以前私が話したことを、覚えていたのであろう。

それは、小沢三郎著『幕末明治耶蘇教史研究』という書物で、日本プロテスタント史の名著であった。当時私はその本の価値を知らなかったが、一読して優れた書であることがわかった。

私は夢中になって安藤劉太郎の報告書を読んだ。安藤劉太郎は、横浜のキリスト教会に潜入して見聞きした事柄を、実に詳しく報告していた。たとえば、キリスト教会に出入りする人物について。誰が熱心で、誰がそうでないか。あるいは、宣教師間の争いについて。あるいは、教会内でおこった論争について。キリスト教の教義について。聖書の和訳の進捗状況について。教会内の会議の報告など。「諜者報告書」という常ならぬ文書が、私の関信三に対する関心を一層強いものにしたと思う（註）。

さて維新政府は、天皇を中心とした国家建設を図るために、いにしえの官制を復活させたが、そのひとつに内外の非違を糺弾し風俗を肅正することを目的とす

る弾正台という役所があった。この弾正台から派遣された秘密の探索者が、諜者である。諜者になることは、それ以前とは全く異なる立場になることを意味していた。諜者は身分を秘匿するために弾正台の「台符」の割り符を持たせられ、割り符の一方は弾正台に保管されて、後日の証とされた。やがて官制の変更によって弾正台が廃止され、その業務が司法省に受け継がれると、諜者の中でも特にキリスト教諜者は、太政官に直属することになる。太政官は今日の内閣にあたる。

「諜者報告書」とは、このような特殊な立場にあった諜者が、探索したところを監督官に報告したものであるが、残念なことに、弾正台時代の報告書は未だ発見されていない。これまで発見されているのは、弾正台廃止後、太政官直属になってからのものだけである。

何年前か前、本格的に関信三研究に取り組み始めた頃、私は早稲田大学図書館を訪ねた。同図書館が所蔵する膨大な大隈家旧蔵文書には、キリスト教関係文書

が多数収められているが、その中に諜者報告書が含まれているからである。大隈重信が弾正台の業務を引き継いだ司法省の長であったために、最終的に彼のもとにそれらの文書が集められたものと思われる。小沢三郎氏が紹介された安藤劉太郎の報告書も、大隈文書中のものである。原稿をまとめる前に、安藤劉太郎の直筆を見ておきたかった。

あらかじめお願いはしてあったが、当日特別閲覧室で見せていただけなのは、原本のコピーであった。けれども、その時の私には、コピーだけでも十分な迫力だった。それまで私が親しんできた小沢氏の『幕末明治耶穌教史研究』では、当然ながら、すべての文字が均質の活字だった。けれども、安藤劉太郎はさまざまに書体で報告書を書いてきた。少し右下がりの控えめな印象の楷書。右上がりの勢いある行書。巻紙に書かれた力強い草書。それぞれ別人の手のようにも感じられるほど、多様な筆使いである。彼の筆跡を見て、彼の報告書にはそれぞれ明らかな温度差があるという、

気づいてみればあたりまえのことに初めて気がついた。私にとって大きな発見であった。

大隈文書に収められていたのは安藤劉太郎からの報告ばかりではなかった。長崎、大坂、函館等に派遣された諜者たちが、続々とその地のキリスト教事情を報告してきていた。諜者からの報告ばかりではない。各地の役人や有力者たちからもキリスト教情報が寄せられていた。それらの文書を繰りながら、私は自分自身が、キリスト教が禁止されていた時代の、諜報活動のただ中に置かれているように感じて圧倒された。

#### 諜者として横浜へ

ユウリョウ  
猶龍（関信三の僧侶時代の名）が「弾正台諜者安藤劉太郎」になったのは、明治三年秋のことである。

おもしろいことに、ちょうどこの頃、猶龍は本山から横浜留学の辞令を受けていた。長崎探索に続いて大坂に転じた後のことである。この辞令で、彼は、「東本願寺家従四等待」という身分と、「安藤劉太郎」と

いう名乗りを与えられ、僧形ではなく侍の形相になるようにと命じられていた。つまり、猶龍は、本山から与えられた「東本願寺家徒四等侍安藤劉太郎」という身分で、諜者として、横浜のキリスト教界に潜入したことになる。

注目すべきことに、この時諜者となったのは猶龍だけではなかった。同時期に長崎で活動した東西両本願寺の破邪僧たちの多くが、諜者になった。浦上キリシタン三千人の逮捕に協力したことが直接の契機となつて、彼らは急速に官と結びついていったのである。

猶龍が送り込まれた横浜は、言うまでもなく日本開国の表舞台である。嘉永六（一八五三）年、浦賀に来航したペリーは、翌年再び来航して横浜に上陸し、幕府との間に和親条約を結んだ。調印が行なわれたのが、その頃はまだへんぴな寒村だった横浜村の海岸であった。安政五（一八五八）年、神奈川で日米修好通商条約が調印され、翌年それが批准されると、長崎、

函館と共に神奈川が自由貿易港となるが、のちに警備の都合から神奈川の開港場は横浜に移された。百戸ばかりの半農半漁の小さな横浜村は、以後、外国商館が軒を連ねるアジアでも有数の国際貿易都市として急速に発展する。

横浜は、開国の舞台であつたばかりでなく、開教の舞台でもあつた。文久元（一八六二）年初めには、居留地の外国人のために、カトリック教会の天主堂が現在の中華街東門近くに建てられている。文久二年に横浜見聞をした猶龍の兄晃耀は、のちにこの時のことを破邪学の講義で次のように語っている。「関東二行キ、横浜二行クニ一堂アリ、コレヲ見レバ天主堂トアル。額ヲ上テソノ勢堂々タルコトナリ。カンガイ胸ヲツキ、フンバツヒヂヨイカラシ、声ヲアゲテ嘆息致セシコトナリ」（雲英晃耀講述「護法総論」）

晃耀が京都から横浜に下つた年には、英国国教会の教会堂も建築されつつあつた。開国と同時に到来したプロテスタント各派の宣教師により、地の利も加わつ

て、横浜は日本人へのキリスト教伝道の拠点となりつつあった。明治に入る頃には、プロテスタントの宣教師たちは横浜においてそれぞれの地歩を築き、数も増え、積極的な活動を展開していたのである。

今や「安藤劉太郎」となった関信三自身の言葉によれば、明治三年秋以降、彼は横浜において、「元弾正台渡辺大忠ノ内命ニヨリテ、美国ノ教師ブロン（ブラウン）、ゴープル、ヘボン、バラ、英国ノ教師ベヤリン此他女教師キダ、プロエン（プライン）等へ出沒し搜索ノ事情一々言上」していたという。当時横浜に居住していたプロテスタントの宣教師のすべてである。

このうち、のちに安藤劉太郎に洗礼を授けることになる米国改革派のバラは、当時一六七番の石造りの小さな礼拝堂で伝道活動を始め、並行して英語教育に取り組んだところであった。一六七番館は石造りの小さな建物であったが、日本のプロテスタント教会発祥の地となる。現在の横浜海岸教会である。通りに面した

教会の庭にはそれを記念する碑が建てられているが、気づく人はまれであろう。

そのすぐとなり、現在横浜開港資料館が建っているのは、かつてペリーが上陸し、幕府との間に和親条約を結んだ

場所であり、資料館の前はそれを記念する広場になっている。開国と開教の原点がとなりあって存在しているのが、関信三の生涯を考えると何とも象徴的である。

安藤劉太郎は明治五年にバラから洗礼を受けているので、最もバラに近かったと考えられるが、彼が諜者報告書で多くの宣教師たちの名をあげていることが示しているように、親しんだのはバラに限らなかった。彼は、ヘボンの日本語教師として聖書の和訳に貢献した奥野綱昌と親しいので、ヘボンにも近かったと考え



られる。また婦人宣教師たちとも関わりがあった。当時のキリスト教会は、「基督公会」という、特定の教派にとらわれない合同教会を生み出したことから知られるように、各派の宣教師たちが協力して日本伝道に取り組んでいた。聖書の和訳もその中で行なわれていったのであるが、そのような宣教師同士のつながりの中で、安藤もまた各派の宣教師たちのもとに、違和感を抱かれることなく出入りすることができたのである。また彼特有の目的から、自然、複数の宣教師のもとに出入りしやすい立場に身を置いていたであろうと思われる。

バラは後年、“Shinonome, Day-Dawn, or The Beginnings of the Kingdom of God in Japan” (未公刊) と題する手記に、「(明治五年二月に受洗した) 九人の青年たちは全員、現在の海岸教会の石造の礼拝堂で開かれていた私の英語学校のメンバーであった」と書いている。また、「私の学校には、二五人から三十人くらいの子供たちが来ていた。全員侍だったように思う

が (all Samurai I suspect)、日本の最北端から南に至る諸国からやってきた、階級もまちまちの侍たちであった」とも書いている。安藤劉太郎は、新知識を求めて諸国から横浜に集まった、若い侍たちの一群に身を置くことに成功したのである。

### 宗教政策の揺らぎ

しかし、居留地横浜の生活は、彼にとって決して展望のあるものではなかった。さきの長崎時代は、危険と背中合わせではあったが、彼にとって生き生きとした日々であったと思う。破邪僧としての活動は、本山派遣とはいっても、根本的には彼自身の希望であった。猶龍は強いられて禁忌のキリスト教書を読んでいたわけではなく、強いられて長崎に送られたわけでもない。彼は自ら望んで、他の多くの僧侶たちが夢にも思わず、また仮に命じられたとすれば、なんとか避けようとしたであろう道を選んだのである。だから、彼は直接的な身の危険を感じても引き下がらなかつた

し、それどころか、本山からの給与を辞退してまで、長崎にとどまろうとしたのである。彼の目的は、キリスト教を研究してその邪教たるを検証し、反キリスト教書を書き、日本国からキリスト教を駆逐することであつた。そうすることによって、仏法を護ろうとしたのである。長崎時代の猶龍は、それを遂行することができると思つてゐた。

そして間もなく、彼にとつて無残なことに、その意図はむなしなものになるが、しかし当時、猶龍以上にそれを信じていたのは、維新政府であり、政府を構成する個々の人間たちではなかつたらうか。彼らは徳川幕府と同じキリスト教禁止政策をとり、違反する者は捕らえた。浦上四番崩れといわれるあの大逮捕と流罪は、旧幕以上の厳しい措置であつたが、彼らはそれが新しい国家建設のために当然に必要な処置であり、また力づくでそれを押し通せると、本気で考へていたのである。彼らは「開国」の意味を知らなかつた。やがて列強諸国の「干渉」によつて、政府の宗教政策が批

判され、ついにキリスト教禁止の高札を降ろさなければならなくなつてからも、彼らは宗教の統制を実質的にはやめようとしなかつた。現代の私たちは、テレビや新聞で「開国」に揺らぐ他国の状況をもどかしい思ひで見ることがある。なぜ政府は宗教弾圧をするのか、自由な発言を認めないのか、自由な出入国を認めないのか。しかし、維新期の日本はまさにそのような状況であつた。開国したとはいへ、なお長い鎖国封建時代を引きずつていたのである。

しかし列強外交団の監視のもとで、政府の対キリスト教政策は、明治四年、五年になると、変化していかざるを得なかつた。とりわけこの頃、政府は、幕末に結ばれた不平等条約の改正という、外交上の最重要課題に直面してゐた。これに対処するに、キリスト教の問題は避けて通ることができない大関門だったのである。これまでのように、断固処罰という方針を貫ける状況ではなかつた。明治四年末、岩倉使節団が米欧歴訪の旅に出発した。政権首脳部の半数が一年数か月も



の長きにわたって外国を歴訪するという、世界史上まれなこの試みは、キリスト教を解禁しないまま何とか条約改正に持ち込みたいという背景があればこそ、思い切った企てだったと言えよう。政府はそこまで追い込まれていたのである。やがて使節団は、行く先々でキリスト教弾圧に対するごうごうたる非難をあびることになる。

### 「伝言機械」

早稲田大学図書館を訪ねて安藤劉太郎の筆跡を見て以来、私は諜者報告書を大隈文書のマイクロフィルムで読むようになっていた。大隈文書から教えられたことは多いが、ある時、文書のなかに一枚の興味深い書き付けを見出した。諜者を派遣する側が書いたためずらしい書き付けで、未発表の文書である。太政官の名入り用箋に二枚。冒頭に「窺書」とあり、あて名も差出人名もない。日付は辛未（明治四年）十二月三日。書かれている用件は主に「深堀事件」について。その中

に次のように、安藤劉太郎に言及されている。「深堀事件ニ付横浜表外国人内評之模様ヲモ探索為致度即今安藤劉太郎宅人ニテハ行届兼候ニ付高木茂事不取敢差遣シ度奉存候」

深堀事件とは、伊万里県（現長崎県）深堀地区のキリシタン数十人の逮捕に端を発し、それに長崎在留英国領事が抗議して外交問題化したものであった。これに対して政府は、捕縛自体が間違いであった、というより、そんな事実はなかったと決着しようとしていた。諜者たちはそのために狩り出されたのである。諜者たちの役割は、この問題に外国人たちがどう反応しているか、実力行使をしそうな気配はないかを探り、事態を穏便に収める落とし所を探ることであった。結局伊万里県では、十二月二三日、逮捕した全員を改宗しないままに釈放している。諜者たちは望んでいたキリスト教取締のためではなく、むしろ、それとは逆行する目的のために働かされたのである。もし彼らが諜者ではなく破邪僧のままであったなら、彼らはこの捕

縛は正当なものであると訴えたはずである。諜者がキリスト教に通じていることは、彼らの意志とは無関係に、ただキリスト教を通して獲得した外国人社会の内側の情報を得るためのアンテナとして利用された。そして、その代価に褒美が与えられたのである。

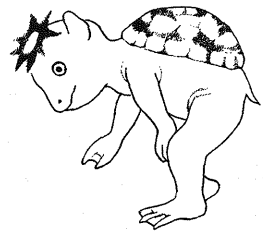
安藤劉太郎にとって、諜者となったのはやむを得ない成り行きであつたし、彼自身望むところでもあつたと思う。政権の方向と自分の望む方向が一致している時には、その管轄下にあつても、さほど問題は感じなかつたであろう。しかし、燃えるような思いを抱いて長崎におもむいた頃とは、時代が違つてしまつた。政府の諜者として働きながら、安藤劉太郎はしだいに、自分たちが当初望んでいたのとは違う方向で使われていることに、気づいていく。

深堀事件で使われたのは、かつての東西本願寺の破邪僧グループそのままであつた。政権は彼らを実に巧妙に使つていた。東西両派に通じる小栗憲一を要とし

て、諜者集団は緊密に束ねられていた。安藤劉太郎の報告書には、「その後豊田君に、二円下さるようになつたが、お受け取りいただきましたか？」

とか、「恐れながら、別紙を正木君にお渡し下さいませよう」という追記がある。「小栗憲一」と「正木君」は東本願寺の、「豊田君」は西本願寺の、かつての破邪僧で、長崎以来の猶龍の盟友である。さらには、「大坂に滞在中の安休寺からの手紙を別添しましたのでお受け取りください」という追記まである。

「安休寺」とは兄晃耀のことである。おそらく大坂に滞在した晃耀が、大坂のキリスト教事情を弟に知らせた手紙であろう。これらは言うまでもなく、大隈重信のもとに残された公信であり、諜者報告書である。血縁も断ち切つたはずの彼らが、いかに身内の危機意識



で諜者活動をしていたか。当局はそれを阻むどころか、むしろ彼らの危機感を巧みに利用して、彼らを狭い身内意識と共通の使命感の中に浸らせることによって、意のままに使役していたのである。

明治五年、安藤劉太郎は律儀な文字でしたためた涙告の書とも言うべき長い文書の終わりに、「諜者は千里の外より彼が情実を奉告する伝言機械なれば、諜者なくば廟堂の君子、何をもって防邪の方向を立て給うや」と書いた。「伝言機械」——。彼は自分自身をそう呼ぶはかはなかった。

安藤劉太郎は、横浜での諜者時代、のちに彼の上司となる中村正直と諜報活動の過程で出会った。次回は、幼稚園の歴史にとって意味深い、両者のこの奇妙な「出会い」について書いてみたい。

#### 註

諜者報告書を本格的に紹介したのは小沢三郎氏である。小沢三郎氏の『幕末明治耶蘇教史研究』（日本基督教団出版局一九七三／初出版は昭和19 亜細亜書房）と、同じく同氏の『日本プロテスタント史研究』（東海大学出版会 昭和39）は、日本プロテスタント史研究の必読の書であるが、関信三研究にとつても、彼の諜者時代を考える上できわめて重要な文献である。

皮肉なことに、諜者たちが書き残した報告書が、今では日本の教会発祥の時代を証言する貴重な資料となったため、小沢氏以外にも諜者報告書を取り上げた研究者は多い。それらの中には安藤劉太郎にふれたものもいくつか見られるが、関信三そのものに照準を合わせた研究はない。教会史から見れば、彼が書いた諜者報告書は一級の資料であっても、それを書いた個人については、特別な関心はなかったということであろうか。

# 目をこらして (5)



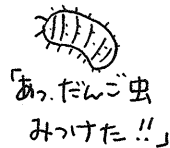
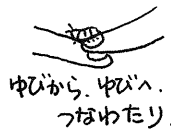
のんびりした日曜日。昼食はシートを広げて外で食べることにした。運河を渡る風が心地よい。

昼食の後、草むらにしゃがみ込んで何かを捜していた娘たちが、うれしそうに戻ってきた。「ほら」そういつて開いた娘の手のひらにダンゴムシ一匹。チョコチョコと動いて手のひらからおりる。

「動くの早いなだね」娘のかずほと友達のあさこちゃん  
は、ジーツとダンゴムシに見入っている。そのダンゴムシは、チョコチョコ動くばかりで、なかなか丸くならない。指や棒でチョンとやっても丸くならない。

「おかしいねえ、ダンゴムシは丸くなるからダンゴムシって言うんじゃないの?」「これは、丸くならないダンゴムシなのかなあ」と話していると、「え、どうしたの?」と父親が会話を割り込んできた。彼は、ダンゴムシに何故かとても詳しい。そんな彼が「さて、ダンゴムシの足は何本でしょう」と娘たちに問題を出した。

チョコチョコ動いているダンゴムシの足は、小さくていっぱいあつてとても数えようがない。「わかんないよー」



にぎった手を。パッとひらいて「ほらまたあつたよ!」

絵と文 宮里暁美 (目黒区立ぶどう幼稚園)



# 耳をすまして

と言うと、ほらこうしたら数えられるよ、と親切にダンゴムシをお向けにしてくれた。

「四本!」「八本!」とはじめのうちは当てずっぽうに  
いつていたのがだんだん真剣に数え始めた。

風に木がそよぐ音がする。

遠くで鳥が鳴く声がある。

スズメが首をかしげながらこちらを見ている。

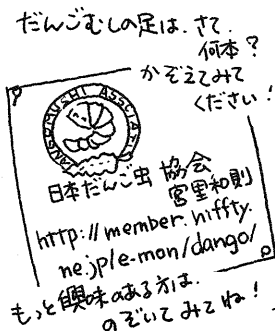
娘たちは、ダンゴムシの足を数えている。

あと少し、というところでダンゴムシが向きを変えて歩き出す。

「待って、待って」「じっとしててね」そんな気持ちを通じたのか、今度こそダンゴムシはおとなしくしてしてくれた。そうして、ダンゴムシの足が何本あるのが分かった。ダンゴムシは、もういいでしょ、とでもいうようににさつさと歩いていった。

目をこらす。もつともつと目をこらす。

その原動力は、何故かな?どうなってる?大好き!という気持ちなんだねと思った。



~~~~~いま、子どもたちは~~~~~

## ははこ 母子のいま

### (3) 社会性をめぐる 子どもの状況

山崖 俊子

はじめに

筆者は大学で「人間関係論」の講座をもっている。受講希望者は毎年かなりの数にのぼり抽選をしているほどである。彼女らの受講希望の理由を聞くと、その殆どがこれまでに友人関係等の対人関係に何らかの辛い体験をしてきており、今後そのような辛い思いをしないうで済むための方法を学びたいというのである。現代の若者たちは一見スマートで、ある部分の「社会性」はむしろ十分過ぎるほどに育っていると一般に思われている。しかし意外にも彼らは対人関係に関わる自分自身の能力に大きな劣等感を抱いているのである。

一方、乳幼児をもつ母親も同様に我が子の「社会性の発達」というテーマに強迫的にとらわれている。それは同世代の仲間の中で育てなければ社会性は育たず、取り返しがつかないことになるという思い込みである。それがいわば「公園デビュー」といった言葉を

生み出した。

また、幼稚園に通園している子どもをもつある母親は一日の内ですごい一番不安であり緊張するかとというと、幼稚園のお迎えの時だという。それは、いわば子どもの「アフターファイブ」の過ごし方が決められるのがお迎えの時なのだそう。すなわち、幼稚園から帰ってからの過ごし方については、子どもが決めるのではなく母親同士の繋がりで決められるということらしい。従って、今日の予定に「お声がかかる」かどうか戦々恐々とした思いでお迎えの場に臨むという。「あなた任せ」の不安の渦巻く中で、唯一救われるのが自分自身の予定が既に入っている時なのだそう。誘われようと誘われまいと、応じられない状況が自分の意志を越えたところで既に決まっていれば、最後の最後まで予定が埋まらない不安を抱え続けるという状況に身を置かずに済ませられるというのである。これはかなり特異な例ではあるかもしれないが、こ

れに近い思いをかなりの親が抱えていることは事実である。すなわち、我が子の社会性を育てるための環境作りとして、できる限り長時間、同年令の集団の中に我が子が居られるようにしなければいけないという思い込みと、母親自身が絶えず人の輪の中に居続けなければまともな人間として評価されないのではないかという思い込みである。

### 期待される子ども像

通常、子どもらしい子どもとして大人から評価される子どもの姿とは「明るく元気で活発なひまわりのような」姿である。いいかえれば、太陽が好きで、裸足が好きで、冒険心が旺盛で、怪我也よくするし真つ黒になつて外を走り回っている姿である。

もちろんこれらを否定するものではないが、外遊びを奨励するがあまり、午前中は保育室に鍵をかけている幼稚園・保育所が少なからずあることを知り、ある

子どもが外で絵本をみている姿に出会ったとき、筆者はある種の恐怖を覚えた。

筆者は心理臨床家として長年「自分が自分らしくいられずに」不安定になっている子どもたちと出会ってきた。登校しなければいけないと頭では十分に分かっているけれど、身体が言うことを聞かず登校できずにいる「不登校」の子どもとの出会いは数知れない。

中学二年の二学期から登校できなくなったある男子は五年間の引きこもりの後、大検を経て好きなデザイアの専門学校に入学し成人式を迎えた時、幼い頃を振り返って「家でも学校でもなるべくはきはきと陽気にふるまい、〃明るく元気な子ども〃でいたつもりです。この〃明るく元気な子ども〃というイメージは周囲の大人たちの自分に対するいろいろな干渉をたちどころに消してしまふ、何ともいえない魅力があるのです。そのため僕はこの固定したイメージに自分のイメージを重ねようとして常に振り回され続けていました。

：情けない話ですが、僕は正直いつて自分が大人とよばれる年齢になって初めて解放され

た気がします。大人というのはそれぞれの社会的責任は重くなりますが、それぞれの趣味、主張は一応考慮されるようになるからです」と語った。

この彼の言葉は我々大人に対する痛烈な皮肉に聞こえる。そして我々の「人間観」「子ども観」「保育観」に対して厳しい見直しを迫ってくる。我々がこれまで意識的・無意識的に曖昧にしてきた根幹に関わるテーマとして極めて深刻に受け止めなければいけない。すなわち、親も保育者も子どもにとってよかれと思つての対応が、実は大人の思い込みによる押しつけ・干渉以外の何ものでもなく、その結果、子どもが最も自分らしくなく生きることを強いたわけである。





さらに、筆者は大学の授業で極めて興味深い経験をした。それは「気質」についての授業の際の発見であるが、自らの気質を把握するために「精研式、パーソナリティ・インベントリ」を実施した。その結果は、「分裂気質」「躁鬱気質」「てんかん気質」に分けられるのだが、三列に並べられた席順とこの気質の結果が実に見事に一致していたのである。席順はもちろん学生自身が自由に選択したものである。

つまり、前列には分裂気質の学生は一人もおらず、後列には躁鬱気質の学生は一人もいなかったのである。その発見から以後も注意してみているがその傾向は同様である。これをどう解釈するかであるが、分裂気質の特徴は「一人で生きることが安定の条件」であり、躁鬱気質は「他者と生きることが安定の条件」であることを考えると、前列には他者との関わりはあまり得意ではない分裂気質の学生が席を選ばないのは当然であり、後列には他者と関わりたい躁鬱気質の学生

が席を選ばないのは十分に納得できる。もちろんこの際の「他者」とは教師であり、教師との物理的距離が即ち心理的距離に他ならない。

多くの場合、教室の中では前の方に席を取る学生は真面目で熱心だと解釈されがちであり、教師の多くは「前の方に座りなさい」と指導する。

「人それぞれ」という個性尊重の考え方は、評価のなるところで子ども自身が主体的に選択したものがその意味があるのであって、そこに価値観が導入されると「指導」の対象となり、「子どものために」という大義名分の下に強制的に矯正が行なわれることになる。

さらに問題なのは数的に躁鬱気質の人間の方が圧倒的に多く、分裂気質の人間は少数派であるという点である。しかも職業に教師や保育者など、人と関わる仕事を選ぶ人間は躁鬱気質であることが多いはずである。そうなると教師や保育者と異なった気質をもった学生・生徒・子どもは周囲の大人から理解されにくい

ことが多々生じるだろうし、しばしば誤解されることになる。親子の間でも同様のことがいえる。すなわち、異なった気質をもった親子は感覚的に行き違いが生じやすい。十分な理解はできなくても、お互いが異なった存在なんだという謙虚ささえあればお互いを尊重し、その結果、不信感を抱くことは避けられる。

前述の不登校児も、周囲の期待を敏感に察知し摩擦を避けて先駆けて周囲が期待するところを演じ続けた結果、疲労困憊し、登校し学業を続ける気力も体力も失われてしまったと考えることができる。そして五年間の長きに渡って「引きこもり」を続けることでようやく疲労が癒され、カウンセリングを受けようという勇氣ある決断をし筆者と出会うことになった。

一週間に一回、一年間のカウンセリングの中で筆者は「あるがまま」の彼を受け入れ尊重し続けた。その結果、「先生は何も教えてくれなかった。だけど僕は初めて自分の内面を語り、誠実に対応してもらい理解

された。僕はだめな人間だ、生きる価値のない人間だと小学校五年の頃から悩み続けてきたが、このままの自分でいいような気がしてきた。行けども行けども闇が続いていた五年間だったが、トンネルの先の方に光が見えてきた」と語ってカウンセリングは終結した。「教育」や「保育」が「矯正」になったとき、それは「あるがまま」の姿が否定され、その結果、真面目で演じる「能力」がある子どもは一生仮面を被り続けることにもなりかねない。

### 社会性とは何か

教育や保育の名の下に様々な場面において、期待されるべき子ども像に向かって矯正する力が増えられているが、中でも突出しているのが前述したところの「社会性」に関わる項目である。

社会性とは児童臨床心理学辞典によれば、「個人の人格を知的側面、情緒的側面などというように分けた

場合、その一つの側面として考えられるもので、普通、対人行動、集団参加、社会的適応などの社会的行動が円滑に行なわれる程度や個人差、あるいはそれらの発達に関して用いられる概念である」と定義されている。すなわち、人間はこの社会において一人では生きていられないわけで、好むと好まざるとに関わらずお互いに何らかの関わりをもつことになる。従って、心理的にも物理的にもより広範な関わりがもてる方が生きやすいということになる。しかし、関わりが広い方が「人間的に価値がある」わけでも決してない。

例えば羨けの中で「偏食」は「悪」とされ、矯正の対象とされている。確かに偏食はあまり多くない方が生きていく上で「便利」である。震災やその他の食料が手に入りにくいとき外国に行ったときなど抵抗なく何でも食べられることは「便利」であり、楽しめる場が広がることは豊かに生きられることにつながる。

しかし一方で「好き嫌い」の感覚はそれと同じくら

い、いやそれ以上に大切である。何を食べても同じというのでは生きることに関心がなく等しい。「便利」であることがいつのまにか「価値あること」にすり替えられ、混同してとらえられていることに気づかねばならない。

同様に対人関係においても出来る限り好き嫌いなく誰とでも付き合っていけることが「良いこと」とされ「大人になった」と評される。これも「偏食」と同様であまりに好き嫌いが強すぎて日々の生活が円滑に進まないのは「不便」ではあるが、逆に誰とでも同じということとは「心が動いていない」ことであり、極めて無味乾燥な人との「くらし」ということになる。

さらに前述したように人に備わったそれぞれの特徴は「育てられ方」にももちろん影響されるが、かなりの部分人それぞれにもともと備わっている「気質」によって



決定されるように思われるし、さらにいうならばどんなに親が頑張つて「理想的」な子育てをしようとしても意識のレベルで操作しうるものではない。むしろ「なるべくしてなつた」結果をその子どもの「あるべき姿」ととらえ、好むと好まざるとに関わらず我が子の「あるがまま」の姿を受け入れていくほかない。

「氣質」とは窮地に立たされたときのゆとりのない状況下でその人が咄嗟にとる行動様式と考えたらよい。先に挙げた氣質検査による「分裂氣質」はまさに「自分と生きる」タイプであるから、混乱状態から復活するためには他者との関係を一切絶ち、自らの内なるメッセージに深く耳を傾け、ジワジワと復元していくのをゆつくりと待つことである。

一方、「躁鬱氣質」は「他者と生きる」タイプであるから、他者との関わりの中で、他者からの働きかけに影響されながら復元を果たしていく。

このように一口に「社会性」といっても、人によつ

て他者との心地よい関わり方やありようはそれぞれ大きく異なる。それを画一的にとらえ、しかも「その方が良い」と価値観を持ち込んでしまうとこれは問題の本質から大きくズレることになる。

さらに社会性についての世間の誤解を指摘しておかねばならない。子どもは生まれ落ちたときから集団を好み、また集団の中に入れる方がよいというのは誤りである。人と関わることを心地よく感じるいわゆる「社会性」とは、まず「個」が大切にされ、「自我」が育つていて初めて集団が居心地よく感じられるものだということである。「個」が大切にされないまま無理矢理「社会適応」を目指して集団に入れられた子どもは、「個」が育たないまま集団という「波のまにまに」漂う「藻」のような存在となってしまう。この状態は決して「集団参加」とはいわずに「集団に群れた」状態という。

ある小学校三年の不登校児は幼少の頃から「社会

性」を強迫的に信奉している母親が、園から帰るとすぐさま外でみんなと遊ぶことを強要してきた。そうしなくない子どもは門柱の陰で夕方までうずくまっていた。しかしそれもやがてバレてしまい翌日からほとんどかく物理的にみんなのそばにいなければならなくなつた。そのうちに彼は自らの思いを放棄した「波のまにまに漂う藻」として絶えず人と一緒でないと不安になる、いわゆる「群れの一員」となつてしまった。

### おわりに

最近の保育界・教育界では「個性」という言葉が頻繁に使われるわりには、むしろ今まで以上に「みんなと一緒」志向が強いように思われる。そしてそこでは「社会性」という言葉で「個」の存在が否定されている気がする。本来の「社会性」は生活する上で「みんなと協調する」ことが「便利」であることが多いという前提として、そのために「人と関われる力」

を育てることの大切さを説いているはずである。

しかしながら我が国は伝統的に農耕文化であり、「我」の感覚は馴染みにくく「我々」の文化である。ところが戦後の急激なアメリカ文化の導入により子ども達の発達の中で「社会性」という側面が俄にこねれなままに取り込まれた。従つて、我々大人たちも十分な深い理解もないままに、誤つた形で「社会性」を強迫的に、形式的に子どもたちに押しつけた。その結果、子どもたちはわけのわからないまま「社会性」なるものに振り回されることになった。

子どもたちの中に生じる様々な「揺らぎ」はとりもなおさず我々大人たちの戸惑いそのものであることを考えると、まず我々大人たちが無理をしないで居心地良く生きることを目指すことである。

— 終 —

(津田塾大学ウェルネスセンター)

特集 〈緑蔭図書紹介〉

辞書と人間

上野 浩道

毎年四月の新学期になると、季語のように新聞などで辞書の広告が競って出る。私の子ども時代に比べて、実に多様な数多くの辞書があるものだと感心してしまう。それだけ辞書に対する需要と信頼が如何に大きいかうかがわれる。

ただ、辞書について気になることがある。それ

は辞書に頼りきってしまうことである。例えば、この辞書にこう書かれているから正しいというよなものである。そして、挙げ句のはてに、この辞書の方が信頼できると権威づけてしまうことになる。それだけ辞書は魔力をもっているとさえ言う。

辞書には辞書をつくった人々の情熱と魔力がこ



もっている。このような辞書づくりに苦闘した人たちの人生と人物像を歴史的に詳細にまとめたのがジョンサン・グリーン『辞書の世界史』（三川基好訳 朝日新聞社 一九九九年）である。この本は訳本で二段組五四ページもある大部なものである。著者はイギリス人であるが、ものごとこだわる姿勢とエネルギーには圧倒される。イギリスの書店では分厚い本が積み上げてあったり、公園でチェアに寝そべりながら大部な本をゆつたり読んでいる光景を見ることがある。その豊かな時間の使い方には羨ましく感じるが、著者の方にもこのように読者たちを惹きつける豊かな知識とエネルギーが備わっていることが本書からも伝わってくる。

辞書をつくる人は辞書編纂家（レキシコグラファー）と呼ばれる。その定義は有名なサミュエル・ジョンソンによると「辞書を作る者。退屈な

仕事をこつこつ続ける人畜無害の存在で、言葉の起源をたどったり、その意味を細々と書き綴ることには浮き身をやつす」とある。このような人々の仕事と人生を本書は紀元前二五〇〇年の古代メソポタミアの粘土板から書き起こしている。そして、ギリシャ・ラテンからイギリス、アメリカへと辞書づくりに励んだ人々の歴史が記述されている。本書のもともとの原題は「太陽を追って」とつけられ、その出典はサミュエル・ジョンソンの一七五五年版『英語辞典』への序文から来ているという。すなわち「この仕事を始めたとき、私は一語たりとも、そして何ごとをもなおざりにすまいと決心した。その上で私は、あまたの文学作品や、知る人もまれな北方の学問の成果に読みふけて無上の時を過ごせるものと思っていた。宝庫に分け入るたびに……新たな発見に報いられ、それを誇らかに人類に知らしめることができるだ

ろうと。……しかし、辞書編纂家は所詮いつまでもそのような詩人の夢を見続けていることはできなかった。……彼にとって完璧を求めることは、いにしえのアルカディアの民のごとく、太陽を追いかけるに等しいことだった。あの丘の向こうに沈んだと、そこまでたどり着いてみても、少しも太陽には近づいていないのだ」という言葉からである。辞書づくりだけでなくどのような仕事をする者にとってもこの言葉は通じるものがある。

私自身、はじめて辞書づくりを経験したのは民間教育史料研究会編『民間教育史研究事典』（評論社 一九七五年）の時のことである。日本の教育や教育学の言葉が圧倒的に欧米の近代教育学の翻訳、移入からきている現状に対し、日本の民間の教師たちが日常の教育実践から営々と積み上げてきた教育の語彙を掘り起こし、それにまつわる書物、論文、学校、人物、事件などを協同で検討

したことである。まだ大学院生の頃で何回も合宿したことだけでなく、辞書づくりのきっかけとなる最初の発表をしたことから今でも印象に残っている。忘れもしないが、

「生活指導」という言葉

について、その定義、内

容、言葉の成立、展開、それに関係する研究などについて報告した。もちろん宮坂哲文『生活指導の基礎理論』（誠信書房 一九六二年）を頼りにしたが。

この事典の中に下中弥三郎の項目がある。彼は  
大正時代に「教育運動」、「学習権」、「自治」などの概念を明確にしていた教育改造運動の指導的組織者であり、理論家であった。その彼が辞書づ





くりを始めるのは、学校に行っていない、また行けなかった人々のために知識を提供する豆辞典が出發であった。彼自身、幼少の頃から兵庫県立村の半農、半陶工の生活を送っていた経験から、社会生活に必要な教材、教具としての辞書というもの的重要性を認識したものと思われる。社会が学校となるために辞書は欠かせないものであった。その後、彼の創立した平凡社の仕事は辞書の出版が中心となっていくのである。

学校教育関係の「モノ・コト」に関して親しみやすく、読みやすいものとして佐藤秀夫『学校教育うらおもて事典』（小学館 二〇〇〇年）がある。日本教育史の碩学によるこの事典は「学校においてありふれたとされていながら、その意味が問い返されていない現象や事物、あるいは近い過去に存在していて、今なお想起されるべきなものが忘れられている事象、さらに、今日しきりに論

じられているものの史的観点を欠いているために『本質』がぼかされていると考える事柄など」を取り上げられていて、非常に興味深い。なお、本事典は、同じ著者による『学校ことはじめ事典』（一九八七年）の続編にあたるものである。

最後に、寺崎昌男編『教育名言辞典』（東京書籍 一九九九年）をあげておこう。教育に関しての古今東西の名言を集め、それに解題を加えたもので、人類が昔から教育について考えてきた知恵を通して、これからの教育を考える大事なヒントを与えてくれる。特に、学ぶ、求める、知る、考える、育つ、生きる、関わる、教える、育てる、築くといった動詞群をもとに言葉が選ばれ編集されている点で非常にユニークである。教育学の入門書としても、また、世界教育思想の書物としても位置づけることができる。

（お茶の水女子大学）

# 忘れられない本

福元 貴子



幼い頃、布団の中で母に読んでもらう本、よく

途中でとぎれ、母をゆり起こす一本に関する私の思い出です。そんな私にとって、幼稚園で子どもと絵本を見る時間は、私自身も楽しいひとときでした。約十二年間の幼稚園教諭としての生活の中で、子ども達と読んだ忘れられない本をご紹介します。ようと思いません。

\*

『きよだいな きよだいな』

長谷川摂子／作 降矢なな／絵 福音館

「あつたとさ あつたとさ ひろい のつぱら

どまんなか きよだいな……」 「こどもが 一〇

〇にん やつてきて……」の繰り返しがおもしろいリズムカルな絵本です。

この絵本を読み聞かせている時、本の半ば程度、子どもが「きよだいな」ってすごく大きいっ

てことなんだ」と納得したといった口調でつぶやいたのです。新しい言葉を子どもがどのように自分のものにしていくのかのついに気付かされた思いがしました。子どもと言葉との出会いという意味で忘れられない一冊となりました。

『ラチとらいおん』

マレーク・ペロニカぶん・え 福音館

犬も暗やみも友達も恐く、いつも仲間はずれにされて泣いているよわむしのラチ。そのラチが、小さな赤いらいおんの助けを借りてどんどん力をつけ、いじめっこをやりこめるという話です。

園で絵本の貸し出しを行っていたのですが、この小さな絵本が大好きでよく借りる女の子がいました。この子は、一見ラチとは正反対。しっかりしていて明るく気も強く、どちらかといえば周りをリードして遊ぶ子でした。初めは、そんな子がどうしてこのよわむしのラチの本を繰り返し借り

るのだろうと思っていました。彼女をよく見ていると、そのしっかりした姿は彼女の一面で、その裏面には弱さもあって、ラチと自分を重ねながら頑張っているのでは……と思われました。子どもの内面に会わせてもらったような一冊です。

『ごきげんいかが』

五味太郎 リブポート

これはカード絵本です。人の顔の形にくりぬいたカードを、おちば、すいか、うち、さかな等のその他の絵のカードに重ねると、その絵はいろいろな表情の顔になります。絵カードにそえてある「……ごきげんいかが」という言葉にあわせてカードを重ねると現れるいろいろな表情の顔に子ども達は大喜びです。カードなので、逆さまにしたりずらしたりして重ねることで、また異なった表情にもなり、それも魅力です。

入園当初、この本を言葉に節ふしをつけて読むと、

毎日「読んで」とせがまれました。そして、自分達でもやってみようと、数人が集まって私が読んだのと同じような節まわしでカードを重ねてみて笑い合っている楽しそうな様子がみられました。

入園当初ということもあり、それまでは子ども同士一緒の場においてもどこかぎこちなかったのが、この一冊の本を通して、自然に気持ちがふれあっているようで、そんな絵本のもつ力を感じました。

### 『けんたうさぎ』

中川李枝子／作 山脇百合子／絵 のら書店

きのうはいたずら・うさぎ、きょうはあべこべ・うさぎ、けんたうさぎは、毎日いろいろなうさぎになります。そして、リズムカルな文で描かれたけんたうさぎの楽しそうな様子や、おかあさん、おとうさんのやりとりは、読んでいると心がほんわりと温かくなってくるようです。

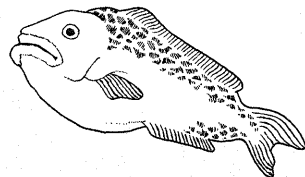
四歳児に絵本ではない童話を初めて読む時は、

きいていられるかな、大丈夫かなとちよつと心配なのですが、この『けんたうさぎ』は一度で子ども

の心を捉えました。けんたうさぎがなるいたずら・うさぎやあべこべ・うさぎ、きえた・うさ

ぎ、おそみみ・うさぎは、大人からみれば、時には困ったことになるのですが、子ども達にとつては魅力的です。いつも

は絵本でもちよつと長いものになると落ち着かない子どもも、この本は別でした。読む時間がなくなるらないように一生懸命片付けて、「今日は○○うさぎのところだよ」と言ってくるというぐあいでした。お話の楽しさを子ども達に教えてくれた一冊でした。



\*

今、私は退職して一歳の娘と過ごす毎日です。初めて自分でページをめくった本、繰り返し楽しんでいる本等、母として忘れられない本がでてきました。最近、何冊もある絵本の中から娘が

「はい」と持ってくる本が数冊決まってきました。これからの娘との生活の中で、どんな忘れられない本がでてくるのか楽しみにしている今日この頃です。

(元公立幼稚園教諭)

## 犬丸りんと

### 香川県健康福祉総務課のホームページ

山本 政人

最近本を読まなくなりました。読むのは新聞、雑誌、漫画、そしてインターネットのホームページ

である。仕事柄、学会誌などはよく読む。というより目を通す。趣味あるいは娯楽として読むの

は、もつばら漫画とホームページである。図書紹介を依頼されて、「最近何か読んだかな」と困惑してしまった。

昔は小説をよく読んでいた。年をとるにつれ、歴史小説、推理小説、SFといった娯楽ものばかりになり、むずかしい本やいわゆる名作はほとんど読まなくなった。私は気に入ると同じ作家のものばかり集中して読むという偏った読み方をす。芥川龍之介、司馬遼太郎、松本清張などには、最近では京極夏彦である。

昔読んだものを紹介するのめどうかと思ひ、最近読んだものからということになると、これしかないというのが、犬丸りんさんの作品である。

犬丸りんさんといえば、アニメ「おじゃる丸」であまりにも有名である。かどうかわからないが、私がりんさんを知ったのも「おじゃる丸」の原作者としてである。どういう人なのかなと思つ

て、知人に聞いてみると、雑誌に漫画を連載していたとのこと、早速探

してみたが、見つからなかった。ところが、ある日、文庫本のコーナーを見てみると、置いてあるではないか。「かんとんに幸せになりたい」(幻

冬舎文庫)という本。何やら見覚えのあるタツチの表紙絵。めくってみると漫画がメインで、エッセイが挿入されている。

「なんだ漫画か」と思って読んでみると、意外に面白いので購入。読みやすいのですぐ読み終わつたが、二度三度読み返してみると、読めば読むほど面白い。『かんとんに幸せになりたい』という題名通り、これは簡単に幸せになれる本である。



その後、知人からほかにも作品が出ていることを聞いて探してみた。

見つかったのは『偏愛』（読売新聞社）という短編小説集と『んまんま』（角川文庫）というエッセイ集。この人、漫画だけでなく、小説も書くし、エッセイも書くし、多才な人である。ユーモアというか、アイロニーが効いているところは、どことなく原田宗典さんと似ている。大きな違いは女性であること。りんさんのユーモアやアイロニーは男のそれと違い、厭味がなく、「まったり」している。「癒し」という言葉が当たるかどうかかわからないが、『かんたんに幸せになりたい』にしても小説にしても、読んでいて肩の力がが抜けるし、ものによっては笑いがこみ上げてきて、それをこらえるのに苦労する。

犬丸りんさんに興味をもって、インターネットで検索してみた。「おじやる丸」以外にはなかなか

が見つからない。しかし『偏愛』や『んまんま』を紹介しているホームページがあった。どんなページかと思つて見ていると『かわ健康福祉情報ネットワーク』というホームページ。香川県の健康福祉総務課が運営しているサイトである。

これがすばらしいホームページで、私もいろいろなホームページを見ているが、これだけのものはなかなかないと思う（しかもお役所のサイトである）。健康福祉関係の情報提供がメインで、子育てや介護保険の情報などが盛りだくさんだが、図書紹介や管理者の方の旅行記などもあつて、読みごたえがある上に面白さもある。しかも毎日のように更新されていて、最新情報を見ることができる。管理者の方にホームページのことを紹介してもいいかどうか、おうかがいのメールを出したら、快くご承諾をいただいた。

というわけで、図書紹介ではないのだが、おす

すめのホームページである。因みにURLは  
<http://www.hw.kagawa-swc.or.jp>である。トップ  
ページにメニューがあり、そのなかの「健康福祉  
あいらんど」を選択すると、またメニューが出て  
くる。そのなかの「ぶくぶくぶつく」というボタ  
ンから図書紹介のページへ入ることができる。そ  
のほかにもたくさんページがあり、有益な情報や  
面白い記事ばかりなので、インターネットをなさ  
る方は一度訪ねてみてはいかがかと思う。

いうまでもないが、今や図書の形は紙ででき  
本だけではない。ホームページというのは、活字  
もあり、画像もあり、音も出てくる。それだけな  
ら本と大きな違いはないが、作者に気軽にメール  
を送ったり、返事をもらったりすることができ  
る。こういう送り手と受け手のコミュニケーション  
が容易に成立することが、ホームページのいい  
ところである。本だと、作者に手紙を出すことは

普通しないし、出しても  
返事がくることはまずな  
い（くるのは同人誌くら  
いである。それも最近  
はメールでというのが普通  
である）。

もとより本を否定する  
つもりではない。しかし  
本が売れない、読まれな  
い事情は、個人的にはともよくわかる。だから  
こそ、若い世代には「本を（本も、といった方が  
素直である）読みましょう」とすすめなければな  
らないと思う。

（学習院大学）





## 心の目で見える環境問題

吉増 克實

通勤電車の窓の向こうに果てしなく広がる家々の屋根の上の、鳥の影一つない空を見ながら、この空の下には虫も獣も住んでいない、人間だけが、それもおびただしい数の人間だけが（自分もむろんその一人なのですが）住んでいるのだと思いついて、何か空恐ろしい気持ちになったことがあります。かつては同じ空に様々の鳥の群が舞

い、その下に広がる原生林や草原に数知れぬ虫や獣たちが群れ集っていたであろう光景を思い浮かべて、失われたものの大きさに啞然とするような気持ちに襲われていたのでした。

クライブ・ポントニングの『緑の世界史（上・下）』（朝日出版社）をおすすめしたいと思うのはそんな気持ちと関係しています。数年前、本屋で

たまたま目に留め、名前に惹かれるままに買ったのですが、上下二巻の大部のため読むのは後回しにして過ごしていました。昨年、どんなきっかけであったか忘れましたが読み始めたところ、期待以上の内容に驚きました。環境問題を、人類と地球との関わり合いの歴史という観点から該博な知識をもとに見通しよく示してくれています。環境問題にはすでに長い人類史的背景があること、むしろ人類史はそのまま環境破壊の歴史でもあると  
言うことのようにです。

さて、『緑の世界史』には政治的事件も戦争のこともひとつも述べられませんし、いわゆる歴史的な重要人物の一人も登場しません。ここに描かれるのは、次第に増加する人間たちが生きるために地球を自分たちの都合のいいように変えようと  
し、その結果それを破壊してきた歴史です。約二百万年前にアフリカの一隅で生まれた現在の人類

の直接の先祖たちが様々な困難を乗り越えながら約一万年前までに全地球上へ広がりました。人類史の九九パーセントを占めるこの時期人間は狩猟採集生活を送っていましたが、それは思いがけず

豊かな生活であり、短時間の労働を除いて大部分の時間は遊びと祭祀に使われていたそうです。この再生可能な資源による環境との調和的な生活の間にも、人間はいく先々で狩猟生活を通じて多くの大型ほ乳類をはじめとする動物たちを絶滅させていったようです。

そして一万年前に最初の大変化として農耕と定住生活が始まりますが、それは環境の再生可能性を越えて行われた森林破壊と土壌の喪失の過程で



した。古代文明を滅ぼしたものは、戦争よりも文明の発展そのものが引き起こした環境破壊による自滅であり、われわれが現在自然な景観と見ているものは、むしろ失われた原生林の跡なのです。

しかしこの二百年に起こった工業化は過去のどのような変化にまして地球環境を激変させ、地球温暖化やオゾン層の破壊など地球規模でわれわれの生存を脅かす事態まで引き起こしています。文明の進歩とは、増大する人口を養うためにより困難な技術を用い、より多くの時間と労力をかけて生産活動を行わなければいけなくなる過程であり、いまやいずれ枯渇する再生不可能な化石燃料をひたすら消費しつづけているのです。幸福を求めてより一層苦しい努力へと追い立てられ、その努力の結果が破滅であることが分かっているのに止めることもできないという状況は、麻薬におぼれた人々の行動を思い出させます。人類の繁栄、

二百万年続いた狩猟採集生活の最後の時期に地球上の人類は四百万人（！）だったものが、農耕生活が始まって一万年後二億人に、それがこの二百年で六十億人に増えてさらに毎年数千万人ずつ増え続けているという事実が、地球に起こっている変化の異常性とわれわれの直面する現在の危機的状況を示してくれるのではないのでしょうか。

『緑の世界史』の第一章はイースター島の教訓と題されています。そこには孤立した島での文明の興隆と環境破壊の結果起こった突然の没落と原始生活への退行が描かれています。そしてイースター島の人々は、そこで起こりつつあることを知りつつ、それが枯渇するまでついに破壊をやめることができなかつたのです。それは地球という孤立した宇宙の島にすむ現在のわれわれの姿を象徴しているかも知れません。

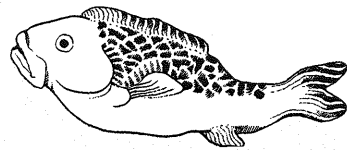
『緑の世界史』の訳者でもある石弘之氏自身の著

作『地球環境報告Ⅱ』（岩波新書）は猖獗を極める大規模な環境破壊の現況報告です。上流の灌漑のために河口から七百キロにわたって干上がった黄河の流れ、あるいは同様の農業開発のために干上がり世界地図に見る湖の形まで変化したアラル海の姿など読むにつけても慄然とせざるをえません。

ドイツの哲学者ルードヴィッヒ・クラージェスは『人間と大地』（うぶすな書院）に収められた一九一三年の講演「人間と大地（地球）」の中ですでに「進歩」の名の下に行われている森林破壊、河川の汚染、動物種の絶滅など地球の破壊を描きつつ、それが心を見失い支配欲に憑かれた人間の仕業であることを述べています。大気にせよ、水にせよ、われわれは地球環境に完全に依存して生活しています。それらはそれなしには一瞬の生存すら不可能なものです。われわれと地球との関係

は生まれたばかりの赤ん坊と母親との関係とまさに同じです。クラージェスはむしろ個々の母は地球という偉大な母の分身であると述べています。われわれ人類は他の生き物共々地球の一部でありその子どもなのです。環境

破壊とはこころを見失い母なる地球との絆を見失った人類という子どもたちの暴走であるとすれば、環境問題とはわれわれの心の問題に他なりません。クラージェスと同じようにポンティンゲも『緑の世界史』の中で、ヨーロッパ人による世界支配の過程でひき起こされた南北アメリカ、太平洋、オーストラリアなどでの、大地の子と言うべき先住民族への虐待をも取り上げていることに、



そのことがよく示されています。環境問題から心の問題へ、緑蔭図書のテーマとして取り組んでい

ただけると幸いです。

(精神科医)

## つながりが見えてくる時

永倉みゆき

小学校に勤めていた時、四年生の子ども達と水をめぐる学習をした事がある。雨が地面に降り川に流れ込み海に至り、また再び蒸発するという循

環の中で、水が、木々を潤し動物を育て、様々に形を変えてあらゆる生命を支えているということ。を改めて知らされた。そしてその同じ水が、私達

の体の中にも流れていると思う時、水道から流れ出てくる何の変哲もない水が、とてもいとおしいものに見えてくるようになったものだ。それは例えばコップの水に「やあ、どこから来たの」と聞きたくなるような、そんな感じだろうか。

実は、世界と自分はつながっていたんだ、ということが実感としてわかると、人は、自分のかけがえのなさも、世界のかげがえのなさも同時にわかってくるように思う。

アラスカに魅せられ、写真を撮り続け、遂にはアラスカに暮らすようになり、撮影中に熊に襲われて亡くなった星野道夫が遺したエッセイを読んでいると、自分の生きている今という地点が、様々なつながりをもって見えてくる。『旅をする木』（文藝春秋）の中に、忙しく東京で働く女性編集者が、一週間だけ彼の旅に同行し、サトウクジラの大群に出会った時のことが書かれている。

「私が東京であわただしく働いている時、その同じ瞬間、もしかするとアラスカの海でクジラが飛び上がっているかもしれない。……」。彼はそれを受けて、〃それを知ったからどうということではないけれど、ぼくたちが

が毎日を生きている同じ瞬間、もうひとつの時間が、確実に、ゆつたりと流れている。日々の暮らしの中で、心の片隅にそのことを意識できるかどうか、それは天と地の差ほど大きい」と書く。そしてその人生観は星野道夫の書くもの、撮す写真の中に形を変えて幾度となく出てくる。私達が、（お昼には何を食べようか）とぼんやり考えている〃今〃という時に、アラスカでは何千年も前か



らそうしてきたように、クジラがジャンプをしているのだろう。ある意味では、私達は、クジラと同じ時間を共有し、同じように生かされている。

日常の中に流れている別の時の流れに、鶴見俊輔は「神話的時間」と名を付けた。この本『神話的時間』（熊本子どもの本研究会）には、幼い子どもとやりとりをして過ごす時に神話的時間が共有されると書かれているが、これは、私自身の保育者という立場から実感として理解できる。

私達は、言葉になる以前の感覚をも持って、現実を生きている。子どもと遊んでいると、そのやりとりの中でその感覚が甦ってくることもある。その感覚は、現実世界の中ではともすると忘れられがちだが、文学を読み解く鍵、聖書を読み解く鍵もおそらくそこにあるのではないかと著者は言う。

神話的時間の世界とつながるきっかけのひとつ

として「不思議」という感覚がある。人は、当り前に見慣れていたものの中に不思議を見出し、魅きつけられるその瞬間、別の世界の流れに気付くことがある。レイチェル・カーソンの『センスオブワンダー』（新潮社）は、そんな体験を美しい言葉で綴った本だ。彼女は言う。ある日の美しい夜空の眺めが、もし一世紀に一回のものであるならば、人は何としても見ようと集まるが、実際には、同じような光景は何十回も見ることができないため、そこに住む人々はその美しさを気にもとめず、いつでも見られるがゆえに、一度も見ることがないのだと。子どもと共に新鮮な目で世界を再発見することで、私達自身の世界を豊かなものにしていきたいと切に思う。

では、どのようにしたら良いのか。子どもと共に世界を見直すなんていう言葉ではよくわからないと言う人には、『小さな自然かんさつ』子ども

と楽しむ身近な自然』(日本自然保護協会編・平凡社)をお薦めする。ここに書かれている、自然と付き合う様々な方法の根底には、人が育つ上で自然との触れ合いは不可欠であるという、きちんとした思想(信念)がある。

センスオブワンダーに衝撃動かされた子どもの表情が、見る者の胸に直接伝わってくるのは、この本『さあ森のようちえんへ』(石亀泰郎・ぱるす出版)である。デンマークにある、毎日森に出かけて行つて遊ぶ(森の中にある幼稚園ではなく、森そのものを幼稚園にしている)幼稚園の一年を、写真と文で綴つた本だが、そこに出て来る子どもの表情が輝くばかりに美しく心地良い。かわい、と言うのでは物足りない。人が満ち足りて生きている時の顔とでも言つたら良いのか。森の中で子どもは何をするの? という問いに対し作者は、「のんびりしているよ」または「好き

なことをして遊んでいるよ」と答える。そして「のんびりしている子どもってこんな風だ。つまり特別になにもしていない」と続ける。しかし、何もしていないと見える中で、子ども達がたつぷり不思議や驚きを味わ

い、育っているのが写真から伝わってくる。今の日本の子どもに一番足りないものが、ここにある。保育に携わる人には、ぜひ手にして欲しい一冊である。

豊かな気付きへのもう一つのきっかけに絵本がある。子どものために絵本を読む時、自分で楽しみながら絵本を眺める時、突如、日頃忘れていたもう一つの世界を思い出すことがある。この本





『絵本の森の魔法の果実』（川端強編・童話館）

には、一三九家庭の絵本体験が寄せられている。

それら一つ一つからは、絵本が確実に、遙かなものと現実をつなぐ架け橋になっていることが伝わってくる。遙かなものとは、親の子ども時代の体験であったり、心を動かされた出来事であったり。日頃、日常生活に埋もれて見えなくなっていたものを、呼び醒す力を絵本は持っている。そのことが理屈でなくわかるのが、この本なのである。

最後に紹介する本は、今まで紹介した本と味わいの少し違う本『アンダーグラウンド』（村上春樹・講談社）である。まだ記憶に生々しい「地下鉄サリン事件」の被害者の方に個別にインタビューをしたものを集めた本だが、そこから浮かび上がってくるものは、新聞や雑誌で読んだのとは全く違った、誇張のない事件と普通の人の人生

とのつながりである。この本を読むと、普段自分が聞き流している出来事の下に、どんなに多くの人の人生が存在していたのかを知り、愕然とする。

ものごとを自分と切り離して考えるのと、自分とのつながりの中で捉えるのとでは、随分違ってしまう。日常生活で精神までがマンネリ化してしまつた時に、これらの本を読むと、水に「どこから来たの」と問いかけた、あの気持ちが戻ってくる。たつぷりした夏の時間に、一冊の本で、世界を見る目を変えてみたいものだ。

（静岡市立安東幼稚園）

# 編 集 後 記

今、私の手元に『岡崎高等師範学校五十年誌』という記念誌があります。ばらばらと見ているうちに、あちこちと興味深く読んでしまいいました。

その序文の中に「岡崎高師のピンチ（困難）が、実はチャンス（幸運）に転換していた」とあります。

ピンチは敗戦直前の四月の創設から始まりました。七月の入学式直前の仮校舎の空襲による焼失、校舎・寄宿舎を求めてのその後の流転、戦後の食料事情、十二月末の二十五キロ離れた豊川への移転、と続きまして。そして、岡崎高師は、卒業生を四回、六百余人送り出し、学制改革

によって七年間で閉校しました。

初代水野敏雄校長は、当時を回想して、「転変極まりない在任一年余は私にとつては五年、十年の歳月に相応する、人生の喜怒哀楽の結集した期間であつたように思われる」と書いています。

異色の教員養成をめざす学校を築こうとした水野校長には、随所で魅力を感じました。「教師が助産婦として、共に学ぶ態度に徹することが肝要なり」とも書いています。

このような、教官と学生がピンチを共にする過程を読んでいると、この学校が「共に生きることを学ぶ」学校に発展していく「プロセス」になつてみえてきます。

「共生の学舎」の体験が、その後の卒業生のチャンスにつながつたのだと思ひました。

(A)

## 幼 児 の 教 育

第七十九巻 第八号

(二〇〇〇年八月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十二年八月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目二丁目一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込 六一四一九

〒〇三三三三九五六六〇三(営業)

〒〇三三三三九五二六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇一〇一〇一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いします。

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いします。

子どもたちの大好きなアンパンマンファミリーの人気者を手づくりしよう。おもちゃやプレゼント、壁面飾りで保育室はいっぱい!!

最新刊

## 手づくりアンパンマンがいっぱい(全3巻)

### グッズ・プレゼント

スポンジや牛乳パックなどの身近な素材を使ったグッズ。フェルトのかわいいプレゼント小物。残り毛糸で、すすいあんでポウシやボールに変身するアンパンマン。うちわやエプロンなど身の回りのあちこちに人気キャラたちが顔を出す、アイデアいっぱいの一冊です。

島田明美／著

A B判 96頁 定価：本体2,000円＋税



### ルームデコレーション

人気キャラクターたちで、保育室の壁面を明るく楽しく演出。入園おめでとうのパネルや、4月から3月までの月ごとの壁面構成は、子どもたちの想像力でゆかいなおはなしも生まれることでしょう。入場門やお店やごっここの屋台・コーナー飾りなど応用アイデアもいっぱいです。

千金美穂／著

A B判 96頁 定価：本体2,000円＋税



### ぬいぐるみ・おもちゃ

型紙をあてて布を切り、ちくちくぬつて化せん綿をつめる。むずかしそうなぬいぐるみも、コッペさんまんに手ほどきしてもらえば、あっ、もうできちゃった! 人形やクッション、フリスビーなど遊べるキャラクターたちは、やわらかく安全なので小さい子どもたちにも安心です。

コッペ平沢／著

A B判 96頁 定価：本体2,000円＋税

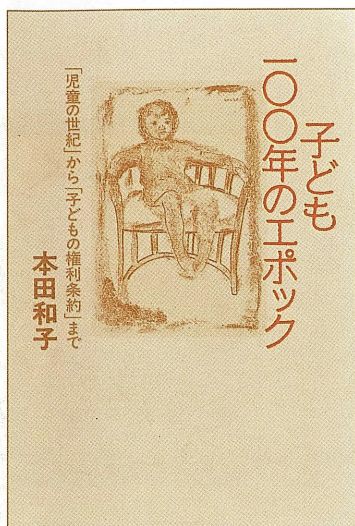


キンダーブックの  
フレール館

20世紀は子どもにとってどんな100年だったのか。  
今世紀の総決算と21世紀の「子ども」を展望した保育者必読の書!!

# 子ども 100年のエポック

「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで



\*本書は  
『幼児の教育』の連載を  
もとに  
まとめたものです。

## 【内容】

この100年間の「子ども観」「子ども-大人関係」の変遷をたどりながら、20世紀の「子ども」を総括した一書です。

世紀の終焉期に頻発する子どもの不可解な事件や理解しがたい言動……これらが物語っていることは何なのか、そしてなぜいま私たちは「子ども」が見えなくなってしまうているのか、保育の前提にある「子ども理解」を深めるのに役立ちます。

## 最新刊 !!

本田和子／著

四六判 280ページ 定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの  
フレール館